

## アフリカ系アメリカ人の歴史とキリスト教

二〇二一年五月十九日

バイブル・サービス

山田 恵

皆さんはアフリカ系アメリカ人と呼ばれている人たちのことを聞いたことがあると思います。俗にアメリカ黒人といわれている人たちで、彼らの祖先の大半は、本人の意志とは無関係に奴隷として三角貿易の名でも知られる大西洋奴隷貿易によってアメリカに無理やり連れてこられました。今日の話の概要は、彼らが奴隷とされた歴史と、その後の彼らの信仰の両方にキリスト教がかかわっていたという話なのですが、そこからどういう教訓が見えてくるのかということまで踏み込んでみたいと思います。

さて、ヨーロッパには古代から奴隷制度があり、古代ギリシャや古代ローマにも奴隷はいましたが、その当時の奴隷はヨーロッパ人がほとんどでした。ヨーロッパ人の関心がアメリカに大きく注がれた背景には、一五世紀頃流行した黙示録思想の影響で異教徒をキリスト教徒に改宗しようという宗教的動機がきっかけでしたが、実際にアフリカ人を見たヨーロッパの人たちは、肌の色が黒く野蛮な生活をしているように映ったアフリカ人を自分たちより劣った人種だと考えるようになりました。そして一五世紀から一九世紀までの間に、アフリカの黒人を商品とする人身売買の貿易である太平洋奴隷貿易がさかんに行われるようになっていきました。この、三角貿易とも呼ばれた

人身売買を伴う奴隷貿易でアフリカから運ばれた奴隷は一二〇万人にもものぼったと言われています。

そもそもキリスト教に改宗させることを目的に赴いたアフリカの人たちを奴隷にするという発想はキリスト教的倫理観に違反すると誰もが思うと思います。実際にキリスト教徒であったヨーロッパの人たちにとって奴隷貿易がキリスト教に矛盾しないということが重要でした。そのために何とか正当化しようと、旧約聖書の「レビ記」二五章の「あなたがもつ奴隷は男女ともにあなたの周囲の異邦人のうちから買わなければならない」という記述を根拠に異邦人は奴隷にできるという解釈が採用されることになりました。また黒人を奴隷にすることについては、「創世記」九章に出てくる「ハムの呪い」を引き合いに出し、カナンは黒人種であるという解釈を持ち出し、アフリカ人は呪われた民族であるため奴隷になるべくして生まれたことになってしまったのです。

このように広まった太平洋奴隷貿易でアメリカ大陸にたくさんの奴隷が送られることになったわけですが、奴隷制度が広まると同時に問題とされたのが、奴隷がキリスト教に改宗した場合でした。なぜなら「レビ記」の二六章には「あなたがたの兄弟であるイスラエルの人々をあなたがたは互にきびしく使ってはならない」という記述があり、キリスト教徒を奴隷にはできないと考えられていたからです。しかし、奴隷の解放は、労働力を必要としていた南部諸州にとっては非常に不都合でした。そのため、奴隷が改宗してもその身分を変えずにすむための、もっともらしい理由を考えだしました。それは、キリスト教の福音は魂の救済のみを扱うのであり、奴隷制といった社会制度は福音がかかわる真の問題ではないとするものでした。この解釈にしたがって、奴隷として生まれたものは生涯奴隷とする法律も各州で制定されていきました。

ここで誤解してほしくないので、大半のヨーロッパ人にとって、太平洋奴隷貿易は身近な問題ではなく、奴隷の処遇についてもよく知らなかったというのが実情でした。キリスト教徒全体が奴隷制度を推し進めようとして

いたわけではなく、キリスト教のグループの中には奴隷制度がキリストの教えに反すると考える人たちももちろんいました。アメリカ国内でも北部では、一八二〇年代になると奴隷制廃止運動が始まりましたが、奴隷制を堅持したい南部の奴隷主は、その折り合いをつけるため、奴隷を管理する方法として宗教指導を取り入れました。ここでの根拠は、新約聖書の「エフェソの信徒への手紙」の六章にある「僕たる者よ。キリストに従うように、恐れおののきつつ、真心をこめて、肉による主人に従いなさい」という部分でした。この一説から奴隷が主人に従うことが重要であると説き、自分たちは奴隷を守っているという主張をして奴隷制度を存続しようとしたのです。

さて、ここまで、本当に大まかに、奴隷貿易や奴隷制度で利益を得ていた人たちが、いかに自分たちの利益のために都合よく聖書の一部を引用し、勝手な解釈を持ち出し、あたかもキリスト教が奴隷制を容認する宗教であるかのように主張してきたかを見てきたわけですが、今度は奴隷の人たちがキリスト教に対してどういう反応をしたかを目を向けたいと思います。奴隷主が信じている宗教なんて、奴隷が信じるわけがないと思うかもしれません。しかし、彼らの反応は実はかなり違っていました。最初は不信感があったことは事実ですが、大半の奴隷の人たちは奴隷商人や奴隷主の聖書の解釈が間違っていると考えたのです。つまり、彼らは、奴隷制を肯定するような奴隷主が信じるキリスト教は「偽物」で、どこかに「本当のキリスト教がある」と考えたのです。当時の書物に記されている表現を借りると、奴隷の人たちは、奴隷主が手にしている「あの聖書のなかにもうひとつの聖書が入っているに違いない」と考えたのでした。面白いと思いませんか。

特に奴隷の人たちの心を動かしたのは、奴隷の苦役に打ちひしがれていたイスラエルの民をモーゼが救い出し、エジプトを脱出する「出エジプト記」でした。この話を通して、彼らは神が二つのことを約束していると考えました。ひとつは、神はこの世における人間の不正を正す「正義の神」であること、そしてもうひとつは、神が社会的

被抑圧者の側に立つということです。そして新約聖書の「ルカによる福音書」四章一八―一九節を根拠に神が社会的被抑圧者の解放に関心を持つていると考えました。

主の御霊がわたしに宿っている。貧しい人々に福音を宣べ伝えさせるために、わたしを聖別してください。わたしたちからである。主はわたしをつかわして、囚人が解放され、盲人の目が開かれることを告げ知らせ、打ちひしがれている者に自由を得させ、主のめぐみの年を告げ知らせるのである。

また、彼らは、神はまた、愛の神であると理解しました。旧約聖書ではイスラエル人が何度も神との契約を破りますが、神はそのたびに契約を更新しました。これは神が民を愛していることの証拠で、その神の愛はイエスを通してすべての人に等しく与えられることになったと考えました。

新約聖書で特に注目されたのは「ガラテヤの信徒への手紙」三章二六―二八節です。

あなたがたはみな、キリスト・イエスにある信仰によって、神の子なのである。キリストに合うバプテスマを受けたあなたがたは、皆キリストを着たのである。もはや、ユダヤ人もギリシヤ人もなく、奴隷も自由人もなく、男も女もない。あなたがたは皆、キリスト・イエスにあって一つだからである。

また奴隷の人たちは、とりわけ、十字架で殺されたイエスの受難、そしてその復活に感銘を受けました。イエスが何の弁明も許されなのままに十字架につけられ処刑された事実は、奴隷の人たちの経験と重なるものでした。彼ら自身も、何の弁明も許されなまま奴隷として酷使され、鞭うたれ、家族と引き裂かれ、死刑となるものもいま

した。それゆえ、彼らにとつてイエスは、自分たちの苦難を理解してくれる存在であり、その復活に勇氣づけられました。奴隸の人たちにとつて、神は、常に弱者や貧者、力のないものとともにあるのであり、黒人の苦難を共有し、解放のために戦ってくれる存在でした。つまり、奴隸の人たちは、奴隸制度を認める宗教としてではなく、奴隸の身分からの解放を約束してくれる救済の宗教としてキリスト教を理解し、信仰を深めていったといえます。

さて、奴隸の人たちの経験を振り返ると、二つのことが見えてきます。第一に、奴隸貿易を正当化したいとか、奴隸制度を維持したいとか、そういうった私利私欲や偏見に満ちた人によって、自分たちに都合の良い勝手な聖書解釈がなされ、悪用されてきたということです。ここで私たちは昔のヨーロッパの人たちがおかした過ちだからと他人事としてとらえるのではなく、私たち自身がそういう考えをする可能性があるということに気づく必要があると思います。つまり何かについて考えるときに、その解釈が私利私欲に基づいたものでないか、偏見や差別を助長するような考えに基づいていないかに常に気を付ける必要があるということです。キリスト・イエスは、生涯を通して、差別や偏見を正すことを行いました。ですから、私たちは、どんなにもっともらしいように聞こえても、根底に差別や偏見があるような考えには決して同調してはならないと思います。このことは、キリスト教を理解する際には、聖書の細かい表現だけにとらわれるのではなく、その教えの本質ともいうべきスピリットの部分を理解する必要があります。ということを教えてください。

そして、二つめの、そしてとても素晴らしい発見は、キリスト教の本質であるスピリットの部分には素晴らしい救済の力があるということです。奴隸という過酷な運命にあったアフリカ系アメリカ人たちは、そのことに気づき、自分たちだけで秘密の集会を開き、信仰を深めていきました。奴隸として辛い労苦に耐えていた彼らを癒し、救いとなったことこそが、その救済の力を証明しています。この二つめの側面こそ、キリスト教の素晴らしい本質だと

思います。そして私自身も仙台白百合女子大学にご縁があったことでキリスト教のスピリットにふれたことで救われる経験をしました。試練がない人はいないと思いますが、私にとつての最大の試練は、かけがえのない娘を八歳という若さで突然亡くしたことでした。その二年後には夫も亡くしました。家族を亡くすることは本当に辛い経験でしたが、キリスト・イエスの示した道や聖書の教えについて考えたことで、暗闇の中に光を見出すことができ、無事試練を乗り越えることができました。コロナ禍という人類共通の試練の中にある今は、聖書のスピリットに触れ、救済の力を知る素晴らしいチャンスでもあると思います。辛いことがあったら、ぜひ聖書を手にとり、そのスピリットに触れてみてください。きっと暗闇の先に光が見えてくるはずですよ。

(グローバル・スタディーズ学科教授)

#### 参考文献

黒崎真『アメリカ黒人とキリスト教―葛藤の歴史とスピリチュアリティの諸相』神田外語大学出版局、二〇一五年。